克服されていく東京

―『空に住む』と『あのこは貴族』で描かれる“縁”に着目して―

山田真優

Ⅰ）はじめに

「東京に行けば成功する」―辺鄙な地方育ちの人間であれば誰でも耳にし、その決まり文句相応の東京の華やかな街並みや豊かな暮らしを想像する。その理想的な生活・人生に縋るような思いで、廃れていく地元を横目に血の滲むような努力を積み上げる若者も少なくない。

他方、前述のような田舎から上京する者などには到底見ることのできない、東京の中を強かに生き続けるお金持ち、いわば貴族。何不自由なく人生を送り、社会的立ち位置や肩書に一切恥じることない運命にある身分を生きる人間の、さぞかし多幸な人生。

そういう虚像を東京は持ち、空虚な夢や理想を人々に与えている。東京というイメージそのものが人々を心身ともに突き動かすビジネスなのであり、その錯覚の中で多くの人間が騙し騙され生きている。それは地方からの上京人も、都内の貴族も同じである。その虚像の本質に、誰しも気づく瞬間が訪れる。飽和しきった期待・希望・信頼は墜落し、中身の伴わない東京に向けられるのは裏切られたことへの失望。その感情は非常に人間的であるが故、行き場をなくす。

この論文ではこのような“釣った魚には餌をやらない”というような東京の卑劣な側面を否定するのではない。この一時の空虚な夢を見させる東京にはどんな意味や価値があるのか、それを『空に住む』（2020）と『あのこは貴族』（2021）という東京を舞台とする 2 つの映画を用いて、特に後者を重点的に徹底的に分析し、見つけ出すことを試みる。絶望や後悔、その先にある東京が与える答えを、映画から導き出していく。

Ⅱ）映画『あのこは貴族』（2021）について

映画は 2021 年 2 月 26 日に公開。初のオリジナル長編作品『グッド・ストライプス』で 2015 年に新藤兼人賞金賞（最優秀新人監督賞）を受賞した[1]新鋭岨手由貴子を監督・脚本に迎えた、女性の監督・脚本家による作品である。本作でも第 13 回 TAMA 映画賞最優秀作品賞を受賞した[2]。作家山内マリコの同作品を原作とし、こちらは 2019 年 5 月 25 日に集英社文庫から発刊された。以降映画のあらすじを公式 HP から引用する。

> 東京に生まれ、箱入り娘として何不自由なく成長し、「結婚＝幸せ」と信じて疑わない華子。20 代後半になり、結婚を考えていた恋人に振られ、初めて人生の

---

[1] 映画『あのこは貴族』公式サイト https://anokohakizoku-movie.com/(2022 年 12 月 17 日最終閲覧)

[2] 注 1 に同じ

岐路に立たされる。あらゆる手立てを使い、お相手探しに奔走した結果、ハンサムで良家の生まれである弁護士・幸一郎と出会う。幸一郎との結婚が決まり、順風満帆に思えたのだが…。一方、東京で働く美紀は富山生まれ。猛勉強の末に名門大学に入学し上京したが、学費が続かず、夜の世界で働くも中退。仕事にやりがいを感じているわけでもなく、都会にしがみつく意味を見いだせずにいた。幸一郎との大学の同期生であったことで、同じ東京で暮らしながら、別世界に生きる華子と出会うことになる。2人の人生が交錯した時、それぞれに思いもよらない世界が拓けていく―。

東京は、現実的に生を営むための衣食住や労働という側面においても多くの格差や問題を抱えている[3]。この点においても東京は、「東京に行けば、東京に住めば、成功できる」という夢物語を持ち、人々に与えていると言えるだろう。しかし本作では、このような言わば生々しい側面は一切扱わない。本作が主題とし、かつ他作品との明確な差別化を図れるのは、「東京を、精神・空想面から紐解いている」という点である。東京の内外から見た“イメージ”という、根拠も姿もない、人々が勝手に作り上げた物語を主題とする。そしてその言わば夢物語や嘘に騙されて生きてきた登場人物が、それを克服していくのである。

この点に、私は本作の映画作品としての文化的革新性を見出している。そして本作の中でこの〈東京像〉を突き詰めるプロセスは2段階に分けられる。それは、①東京内部を生きる人間の生き様や実情を解像度高く描き、最後は②自分次第で克服できる東京を描くということである。東京の中身を隈なく拾い上げ、多面的かつ総合的に分析し、最後には説得力と納得感を伴う希望を視聴者に与える。

東京を舞台とした映像作品の中で、このような傾向や思想が読み取れるのは希少である。そこでまず『あのこは貴族』の文化的革新性を述べる前に、東京で喪失を克服する物語である『空に住む』(2020) という作品の考察を行う。『空に住む』の中で東京は、そこを生きる人間は、どう描かれているのか。今まで描かれてきた東京と、『あのこは貴族』で描こうとしている東京は何が違うのか。これらを明らかにしていきたい。

Ⅲ)『空に住む』(2020) について

i) 概要

『ユリイカ』(2000) や『東京公園』(2011) などの有名作品を手掛けた青山真治監督作品である。本作は、2022年3月21日に急逝した監督による遺作となった。

物語は、交通事故により突然死した両親の死を受け止められないまま、叔父夫婦の計らいで都内のタワーマンションに住むことになった直実を主人公として進んでいく。過干渉の叔父夫婦、同じマンションに住む人気俳優時戸森則、結婚を控えながら不倫相手との子を

---

[3] 中川寛子『東京格差－浮かぶ街・沈む街』(ちくま文庫、2018年)

産む決断する部下の愛子などを巡り、直実は段々と自分自身の軸を見失っていく。直実は、まさに“空の上”のようなマンションの高層で繰り広げられる地に足着かない出来事や人間関係と、反対に低地の古い出版社で働きながら異性との身体的関係・妊娠・出産などのリアルな生死のサイクルを生きる愛子との関わりの中で、再び「両親の葬式で泣かなかったのではなく、泣けなかった」自分に思いを馳せることとなる。

ii）考察

本作のメッセージは、「自分の感情もわからず、自分の内外のどこまでが嘘か本当かもわからないけれど、とりあえず生きていく」ということの肯定である。監督はインタビューにおいて「どこまでが嘘でどこまでが本当かわからないという自己矛盾を抱えながら人は生きているんじゃないか」と述べる[4]。しかし、その矛盾を抱えながらも直実は、案外現状を肯定しながら生きている。不満や葛藤を抱えていても、とりあえず現状維持をする方が大切だと無意識に考えており、そのような一種の諦観が漂う等身大の現代社会を描いている。この物語を監督は、「前向きに生きられるだけの要素を綴る」ようにしたと述べ[5]、その“とりあえず”や“なんとなく”という感覚を決して悲観していない。

このような、「流れるままに生きながら、流されないよう生きる」というようなスタンスへの最大のエールとして監督が施している演出は、作品終盤で直実が設ける彼女なりの“区切り”である。時戸森則との表面的・身体的な関係を持つようになってから自身の内外に及ぶ大きな揺らぎを感じながらも“とりあえず”生きていた直実は、マンションに引っ越す前からの長年の相棒であった飼い猫ハルの死をきっかけに我を取り戻していく。直実の生業である編集者としての立場を武器に、「これが終われば私たちの関係も終わり」という台詞と共に直実は時戸森則へのインタビューを始める。これは、今まで彼から誘われる、選択される側であった直実が初めて、その矢印の向きを変えようとした試みであり、かつ「人間関係は地獄のように永遠に続く」と、達観した台詞を作中 2 度も口にする時戸森則への挑戦であった。

「ハルは私だったよ」。ハルが亡くなる直前の直実の台詞である。直実がタワーマンションに越してから自分を見失っている間、ハルは目に見える形で弱っていっていた。抜け落ちていく毛、弱々しくなる鳴き声。直実の発することのできない（身体的な）ＳＯＳのサインを、ハルが全身全霊で訴えていた。そんなハルを悼む形で、直実は自分を再生していく。直実の抱える人間関係、即ち“縁”を再考し、それを整えていくことで取り戻していくのである。

---

[4] ふくおかナビ.【インタビュー】青山真治監督…「自己矛盾を抱えながら人は生きているんじゃないか」. https://www.fukuoka-navi.jp/101346（2022 年 12 月 16 日最終閲覧）

[5] ぴあ関西版 web. 「現代を生きる女性にとって問題は山積みなんです。 そういう印象をどこかで持ってもらいたかった」 青山真治監督が『共喰い』以来、7 年ぶりに手がけた長編映画 『空に住む』青山真治監督インタビュー https://kansai.pia.co.jp/interview/cinema/2020-10/soranisumu.html（2022 年 12 月 16 日最終閲覧）

ⅲ）『あのこは貴族』との親和性・比較

東京を舞台としたあらゆる作品がある中で、私は本作が今現在『あのこは貴族』の最も近い位置にある作品だと考えている。

『空に住む』では、飼い猫ハルを悼む形として、直実は自身の縁を再考する。第一に過干渉であった叔父夫婦、特に叔母との関係性において「放っておいて」と初めて口にし、叔母側が距離を図るようになる。第二に曖昧な関係であった時戸森則に対しては、彼の“哲学本”を出すことを口実にインタビューという今までと逆方向の関わりを試み、かつそこで彼の人間関係に対する一種の哲学を否定する。第三に愛子に対しては、いつも愛子にネガティブ思考を叱られていた直実が、出産を目前に弱気になり泣きじゃくる愛子の様子を見かねて、「産むしかないんだよ」「大丈夫、私がいるから」「産むよ」と強く諭すようになる。そしてこのシーンが、タワーマンションの建つ高地から低地へ降りるための階段で行われている点からも、直実の変化を伺える。作品冒頭「空に住んでるみたい」と言葉を発し自分を見失っていた直実は、自分自身を囲む様々な縁や人間関係に向き合い、それを見直すことで、地に足着けて東京という場所を生きられるようになったのである。

このように、「人間関係との向き合いを条件とし、克服する東京」が描かれている点が2作品の共通点・親和性である。

ここからは反対に、2作品の比較、いわば相違点に着目する。初めにそれらを表に示したものを説明することで、以降の導入としたい。

	東京に対する感情	克服のきっかけとなる感情	克服方法
『空に住む』	未分類	喪失	縁を再考する・切る
『あのこは貴族』	理想・希望	絶望	縁を求める・広げる 縁を再考する・切る

上記の図の通り、2作品は①「(主人公の) 東京に対する感情」、②「克服のきっかけとなる感情」、③「克服方法」の3点において異なる物語となっている。

『空に住む』では、主人公直実は両親を亡くしたことによる気持ちの整理がつかないまま、言わば自分の感情がカテゴライズできていない状態でタワーマンションへ越すこととなる。そこからハルの喪失をきっかけに、縁を再考したり切っていくことで克服していく。対して『あのこは貴族』では、前提として華子や美紀が東京に抱いている感情が肯定的なもので飽和しきっていると言える。その感情を裏切られた結果絶望し、その後縁を自ら求めたり広げたりした結果、また違う縁を切るということの繰り返しの中で東京を克服していく。

このように、特に①③の条件において2作品は真逆の性質を有していると言える。以降、『あのこは貴族』の①③の条件、即ち「東京に強い肯定的感情を抱いていた若者による、その〈積極的克服〉」というべき側面を中心に、この作品の有意味性・文化的革新性を述べていく。

Ⅳ)『あのこは貴族』の文化的革新性

ⅰ）東京を中心とする人間・世界の解像度の高さ

原作者の山内マリコは、この映画で東京に存在する様々な階層（セカイ）を隈なく描くため、その研究に丸 2 年費やしたことを明らかにしている[6]。北国の漁村出身で猛勉強の末身一つで上京した美紀、そして最も多くの人間から不可視だと言える東京の貴族生まれの華子。生まれた世界が 180 度違う 2 人の姿が、本作では何 1 つ違和感なく描かれている。果たしてその為にどのような工夫がなされたのか、原作を含む作中のセリフや演出に着目して明らかにしていく。

①美紀

「相変わらず腐ってんね」。上京して数年たったころ、年末年始に里帰りした美紀が、シャッター街と化した駅前の風景を横目にする台詞である。彼女は地元⇔東京、進学先の慶應義塾大学内に蔓延る文化である内部生⇔外部生というような、二項対立に囚われていることが作中で伺える。

> 地元の悲しくなるほど活気のない街や、完全に時間が止まった実家の居間で、なにをするでもなく箱根駅伝を見ているときのどうしようもなく倦んだ気分を思い出す（『あのこは貴族』,139 頁）

美紀の描写には、監督、そして原作者の出自が影響していることが読み取れる。岨手由貴子監督は長野県出身、大学進学と共に上京。山内マリコは富山県出身、25 歳のときライターの仕事をやめ上京。両者は、同世代であり、東京の人でもない、かといってもはや地元の人でもない、どこにいても自分の居場所というものがない立場の女性であるという同じ像を共有できている感覚があったと述べている[7]。特に山内マリコは自身のコラム[8]で、私的に形成された“わたしの東京”にあこがれ、あくせく働くうちに、あっという間に年をとっていた経験を語る。若年女性だった時間のほとんどを東京にあげてしまったと、自らの東京像を語っている。そして美紀もそうであった。父親のリストラで学費が払えなくなり中退した後、東京の夜の世界を転々としたり、根拠のない“いつか”のための人脈作りに励んだりしているうちに、上京して 10 年が経過しようとしていた。憧れの東京はどこにもなかった。

---

[6] フィガロジャポン.いままでの価値観に縛られなくていい。女性たちの気付きとは？. https://madamefigaro.jp/series/interview/210215-anokohakizoku-marikoyamauchi.html（2022 年 12 月 16 日最終閲覧）

[7] フィガロジャポン.自分らしい生き方のヒントは、思いがけない出会いの中にある。. https://madamefigaro.jp/series/interview/210215-anokohakizoku-yukikosode.html（2022 年 12 月 16 日最終閲覧）

[8] FRaU.「東京」は地方出身者のわたしにとって、あまりに居心地がいい（山内マリコ）. https://gendai.media/articles/-/90944?imp=0（2022 年 12 月 16 日最終閲覧）

そんな中、作中美紀と唯一無二のフレンドシップを育む、高校時代の同級生で同じ大学に進学した平田里英との関係性は特別である。彼女も美紀と自分自身を「私たちって、東京の養分だよね」と表現し、監督や原作者の思想が投影されていることがわかる。しかしその後美紀と里英は一緒に起業をし、東京という場所で自分たちの道を築き始める。美紀を演じた女優水原希子は、「友達がいればやっていけるよね」と思わせてもらえることがどれだけ救いになっていて、そんな友達（平田里英）を持つ美紀が今後何を選ぶのかという点を、映画内で丁寧に描きたかったと述べている[9]。同じ目的を持った仲間との関りを通して、美紀は段々と依然抱いていた極端な二項対立や葛藤、東京への憧憬を忘れかけ、自分は何者でもないという都会の匿名性に染まっていく。しかし「東京で一人暮らしするようになって十年以上が経ち、なんだって笑い話にできる大人の女になったけれど、十八歳の自分はいまも確かに心の奥にいて、時々顔を覗かせることがあった」(『あのこは貴族』,137 頁)。田舎から華やかな生活を夢見て上京した若者の、誰でもなくなりきれず、誰かであったことを忘れられない葛藤が繊細に描かれている。

②華子

東京の階層研究に丸 2 年費やした山内マリコは、特にお金持ちサイドの物語に関しては、相当注意して描く必要があったと述べている[10]。リサーチを重ねる中で、東京で代々お金持ちの人は意外にも、家柄自慢や金持ち自慢のような下品なことはしないよう躾けられ、堅実で控えめ。しかしうちは普通という建前と、ほかとは違うというプライドが混ざり合っているということがわかっていったという。

華子はまさに、前者のような側面に極端に染まった人間として描かれている。意思がなく、何も自分で決めたことがない。その受け身の様子を鮮明に描くため工夫されたものの内 1 つが、華子の洋服であった[11]。華子はお嬢様だからと言って、高級ブランドを身に着けているわけではない。母親から「これを着なさい」と言われたものや、祖母からの貰い物や 2 人の姉からのおさがりを身に着ける。その地味な普通な格好にこだわることが、逆に華子の育ちの良さを醸し出すとして、華子を演じた門脇麦をはじめに意識されたことだった。

このように華子の生活、そして人生は、優雅に見えて窮屈である。東京が“地元”である彼女の解放の手段はどこにも見当たらない。それが如実に表れているのが、代々政治家を輩出する上流貴族に生まれた青木幸一郎との結婚である。一般的に人間は、なにかを変えるため、もしくはより幸せになるために結婚する。しかし華子は、「何も変えないため」に結婚

---

[9] 集英社文庫編集部.映画『あのこは貴族』公開記念インタビュー 監督：岨手由貴子. https://note.com/shueishabunko/n/ne8c7143a6c79 (2022 年 12 月 16 日最終閲覧)

[10] 注 9 に同じ

[11] 映画.com.あのこは貴族 インタビュー：門脇麦&水原希子が振り返る、“道が披けた”と感じた瞬間のこと. https://eiga.com/movie/91088/interview/ (2022 年 12 月 16 日最終閲覧)

しなければない階級（セカイ）に生まれたのであった。

③美紀と華子を通して―東京の外部と内部の描き方

このように『あのこは貴族』は、普段見えていない東京の階層や構造論に踏み込んで描いている。それゆえ原作者や監督は、東京を中心とした世界の解像度を高めることに非常に神経を尖らせていたと言える。『NANA』(2005)、『東京タワー』(2007)、『わたしは光をにぎっている』(2019) など、田舎から都会への上京物語を描く作品は数多く存在する。本作は、第一に上記のような東京の外→中の流れと全く異なる、東京から出られない貴族を可視化し、その窮屈で退屈な実態を偽りなく映し出すと共に、第二にそれを正反対の世界で生きる上京してきた若者と同じ土壌で論じている。この 2 点において私は、東京を舞台とした映画における新潮流を本作が生み出したと考えている。東京に入ってきた人、東京から出られない人、両者を偏りなく平等に映し出すという点に、私は本作の新しさを見出しているのである。

ii）東京の克服―〈積極的克服〉と〈消極的克服〉

①〈積極的克服〉―縁を求める・広げる

別世界を生きる美紀と華子は、華子の結婚相手である青木幸一郎を通して邂逅することとなる。美紀の「東京に行けば幸せになれる」という夢も、華子の「結婚すれば幸せになれる」という夢も、東京という目に見えない魔物によって打ち砕かれる。そんな絶望を、2 人が育む穏やかなシスターフッドによって克服していく。その大きな変化は、本編 124 分のうち、美紀の部屋で 2 人が会話を繰り広げるたった 10 分のシーンに凝集されている。そしてこれは、原作にはない映画オリジナルの台詞、シーンとなっている。

美紀の部屋に上がり込んだ華子は、先祖代々受け継がれたモノや、親の趣向によって選ばれたモノに囲まれた自分自身の家と真逆の空間に、初めはぎこちない様子であった。しかしそれは、美紀が限られた選択肢の中で選び取った自由、美紀の感情によって選択されたモノたち（図 1、2）。美紀の主観によって見出されたその価値に思いを馳せるように、美紀の部屋のあらゆる場所を、華子は歩きながら眺め始める（図 3）。

美紀「こんなひどい部屋って初めてなんじゃない？」

華子「いえ。すごく落ち着きます。」

美紀「狭い部屋って落ち着くよね。」

華子「そうじゃなくて。全部美紀さんのものだから。」

（図１）

（図２）

（図３）

ベランダで洗濯物を干し始める美紀と共に、華子も外へ。２人は安っぽいアイスを食べながら東京タワーを眺め、話し始める（図４）。その日華子は、美紀に明言することは無かったが、既に夫婦仲が冷え切った幸一郎の母に妊活を強く要求され、なんとなく落ち込んでいた。

「事情は分からないけど。どこで生まれたって、最高って日もあれば、泣きたくなる日もあるよ。でもその日何があったか、話せる人がいるだけで、とりあえずは十分じゃない？旦那さんでも、友達でも。そういう人って、案外出会えないから。」

華子に諭すように、自分に言い聞かせるように、美紀が吐いたセリフである。

（図４）

別世界を生きる相手を、その知るはずもなかったお互いの窮屈な人生を、東京タワーを眺めながら想った瞬間であった。それは緩やかな共存であり、2人の東京に対する挑戦でもあったのではないか。

その後美紀は、平田里英と起業活動に専念していく。一方華子は、美紀の部屋で過ごした日の夜、タクシーを使わず自分の足で、雨の東京を、傘をさしながら歩く（図5、6）。

（図5）

（図6）

すると反対側の歩道を自転車で 2 人乗りしながらはしゃいでいる女子学生を見つける。華子がなんとなく見つめ続けていると、女子学生は手を振ってくる。華子は最初は遠慮がちだったが（図7）、最後には笑顔で大きく手を振る（図8）。2人の女子学生を自身と美紀に重ね、直前に美紀の部屋で生じた自らを突き動かす、緩やかでありながら力強い“何か”に背中を押されているような表情・行動である。

（図7）

（図8）

その後帰宅すると、幸一郎を前に「疲れた」と初めて本音を吐く。その後幸一郎との離婚を決断し、古くからの友人でバイオリニストの逸子のマネージャーとして、新たな人生を歩み始める。

美紀と華子の出会いは偶然であり、華子が美紀を呼び止め家に上がらせてもらった経緯も、偶然そのものであった。なぜ華子は美紀を呼び止めたのだろうか？ そしてなぜ彼女の家まで足を運んだのか？ そこに明確な答え（＝意思）がないことこそ「この映画の面白さであり、岨手監督っぽさだと思います」と、華子を演じた門脇麦はインタビューにて強く

言葉にしている[12]。彼女たちの関係性の中に明確な意思はなかったとしても、美紀と華子の各々が、絶望から、東京から、決して目を背けなかったという意思は確かに存在しただろう。彼女たちの緩やかなシスターフッドの誕生には、美紀と華子それぞれの強い意思が条件であった。この中で2人は、東京を舞台にした本当の意味での私の人生を発見し、再構築していくことになる。

このように美紀と華子は、互いにその縁の意味を感覚的に理解し、求めていくことで絶望を克服していった。これを即ち、私は東京の〈積極的克服〉と表現したい。そしてこの〈積極的克服〉によって可能となったのが、美紀と幸一郎、また華子と幸一郎による東京の〈消極的克服〉である。

②東京の〈消極的克服〉―縁を再考する・切る

(1) 美紀と幸一郎

原作では、美紀が華子と幸一郎の結婚式に"華子側"の招待客として参加するという描写によって幸一郎との別れが描かれているが、映画にこの描写はなく、新たにオリジナルのシーンが設けられている。

場面は、いつも 2 人が会っていた居酒屋。幸一郎に餞別として地元の名産品を渡しながら、「だって寂しいじゃん。この10年間、幸一郎が一番の友達だったから。」と言い、最後は「私がどこで生まれたかも知らなかったでしょ」と美紀は述べる。幸一郎との縁を切る覚悟の上でも、そう簡単には割り切ることのできない、原作とは異なる繊細な美紀が映画では描かれている。これは、美紀と境遇の似た水原希子が彼女を演じることが決まってからこだわった部分だと、監督は述べている[13]。派手でリッチな印象のある水原希子であるが、上京当時年齢を騙しながら東京でアルバイトをしていた過去を持ち、脚本を読んだとき「これ、私です。」と監督に伝えていた[14]。別れを素直に「寂しい」と表現してしまう、まだ精神的に大人になり切れない、ナイーブな美紀像を、演者の経験から導いていた。

そんな美紀であるが、幸一郎との関係に潮時を感じていたことには違いない。原作では、美紀が近松門左衛門の浄瑠璃『心中天網島』に描かれる「女同士の義理」に感銘を受ける様子が描かれている。『心中天網島』とは、あるろくでなしの男と、その妻と、遊女がいて、この妻と遊女が男を巡って傷つかないようお互いを気遣う不思議な物語である。遊女は、夫に死なれては困るから別れてくれと頼む妻の願いを叶えようと、男からの心中の提案を拒絶する演技をする。しかしそれを見かねた妻は、このままでは遊女が自殺してしまうと心配になり、逆に遊女を助けるよう旦那に懇願する。一見馬鹿馬鹿しい激情型の恋愛物語であるが、この物語の本質は、男が無自覚・無意識に女性を分断しているということである。この話を美紀に紹介した華子の友人・逸子は「女はサーキュレーターじゃない」「女性同士

---

[12] 注 11 に同じ
[13] 注 9 に同じ
[14] 注 11 に同じ

を分断させようとする価値観が普通にまかり通っている」と作中で語っている。幸一郎も、いわばこの物語の男であった。無意識に美紀と華子を、女性同士を分断していた。そんな自然と罷り通る文化にけりをつけ、華子を敵視するのではなく守るという義理を立て、それを貫き通したのである。

一方幸一郎にとっては、常に呼べば飛んでくる都合の良い女に突然告げられた別れ。

美紀「別に困らないでしょ？」
幸一郎「そういうことじゃないじゃん」
美紀「そういういことだよ」

曖昧な関係に甘んじていた幸一郎であるが、彼も彼なりの絶望を胸に生きていたのであった。

(2) 華子と幸一郎

映画での幸一郎は、原作より随分と角が取れている。それは監督が意識的に改変したところだと述べている[15]。華子の家系以上に幸一郎は、固定観念に縛られ、文化と伝統の中を強かに生き、無抵抗に敷かれたレールを生き続けている。しかし幸一郎は、そんな自分自身の人生を違和感なく飲み込んでいるわけでは断じてない。その異変にとっくに気づいていながら、抗う機会も術もなかった。それが幸一郎にとっての、絶望であった。そんな彼は映画内で、過度に女の敵として、悪者として描かれているわけではない。あくまでも穏やかで、仲介的で、だからこそ“無自覚に”女性を分断してしまっている存在として描かれている。「彼一人が痛手を負うことで観客がスッキリするような終わり方にはしたくなかったんです」と、監督は言う[16]。

絶望の中で幸一郎は、華子以上に結婚を目的ではなく手段として捉えていたと言える。そこに愛など無く、先祖を安心させ、その血を絶やさないよう子孫を残すための手段だった。そんな幸一郎は、美紀に加え、華子からも別れを切り出される。しかしそれは、華子が与えてくれた、彼の人生における最初の解放だったように思う。対して華子は、幸一郎を愛していたのは事実である。愛していたけれど、愛されていなかった。彼女にとっても離婚の決断は、人生で積み重なった空虚な選択への初めての抵抗であったと考える。それを可能にしたのが、他でもない美紀とのシスターフッドであった。

異性と本物の関係を築いたことのなかった2人が、結婚して、失敗もして、定義できない関係を築いた。この出会いと別れによって、2人は無意思で生きることへの抵抗を覚えた。2人はやっと、自分らしい人生のスタートラインに立つことができた。華子と幸一郎

---

[15] Hanako.『あのこは貴族』岨手由貴子監督に聞く、“女性”の生活。自身のライフスタイル、今描きたい女性像とは？. https://hanako.tokyo/learn/272982/（2022年12月16日最終閲覧）
[16] 注15に同じ

にとって、この物語のクライマックスである 2 人の別れはハッピーエンドであると、監督は初めて原作を読んだとき感じたと述べている[17]。そしてその感覚を、幸一郎演じる高良健吾と、また華子演じる門脇麦と共有できたという[18]。この映画は、逸子のバイオリンを聴きながら、華子と幸一郎が穏やかな表情で見つめ合う原作には存在しないシーンで幕を閉じる。それは、「私たち、出会ってよかったね」という、まさに 2 人の新たな人生の始まりにふさわしい表情である。

③〈積極的克服〉から〈消極的克服〉へ

このように『あのこは貴族』では、「絶望から目を背けない強い意思」をもとに「他者との積極的な関わりを通して克服していく」東京が描かれている。即ち、意思とコミュニケーションを武器に東京と戦える、東京で自分の人生を選択できるという、無責任な東京への強気な姿勢が伺える。新たな縁をきっかけに、既存の縁を見直すことができる。その繰り返しの中で、東京での自分らしい生き方を見つけていく。これが、縁を切ることだけで東京を克服した『空に住む』や、無責任な東京を徹底的に悲観する“タワマン文学[19]”などと異なる、本作の第二の文化的革新性だと考える。

V）結論

この論文は、東京のもつ空虚なイメージや虚像が無責任に若者に夢を与えているという現状を、肯定するヒントを映画から導き出すことを目的とした。

『あのこは貴族』の原作者山内マリコは、東京を「すでに死んだ恋人」だと例えている[20]。かつて上京する前の自分が抱いていた東京のイメージは、もうまったく思い出せない。もうあの頃の私が恋していた東京はどこにもいない。しかし東京は、再生を繰り返す。亡くなった時代の層を重ね、前へ前へと進み続ける。「はて、自分はなにを求めて、この街にやってきたんだっけ？」

目的を失い、東京はあっという間に、そして何度も生まれ変わる。しかし、そのたび見つける自分の人生を、懸命に生きる。東京に翻弄される人生は、決して悪いものではない。その強く優しいメッセージが、『あのこは貴族』には鮮やかに映し出されていると考える。

VI）さいごに

今回私は『あのこは貴族』を論じるために『空に住む』という作品を引用した。これは、後者が前者の前段階にあるということや、後者が前者に劣っているということを述べるた

---

[17] 注 9 に同じ

[18] 注 9 に同じ

[19] 2021 年末頃から Twitter を中心に話題となっている、高層マンションに住む人々の生活の悲哀を誇張的に描く文学のこと。

[20] 注 8 に同じ

めではない。この2作品は、東京とそこに生きる人間（性）を論じる作品として非常にフラットな位置関係にあると考える。作品として目指されていたゴールやそこに向かっていく方法にほぼ違いはなく、ただ物語が異なるだけである。どちらを論じるか、それは論者のバックグラウンドや好みの問題にのみ依存しており、今回私が『あのこは貴族』を論じたのも、私の主観的な意識や問題に沿ったものであったことを、ここに一度書き留めておきたい。

東京での生を揺蕩うように滑らかに描く『あのこは貴族』。対して、今回論文で取り上げることはできなかったが、毒気が強く皮相的な東京を描く“タワマン文学”。これらは東京を舞台とした映画・文学の新ジャンルである。両者は偶然にも、込められた感情や見る者を誘い込みたい世界が真逆である。しかしこれは人々が東京に対する視点に限界を感じ始め、そこに多様性を求め始めた兆候であり、必然的に追い込まれた状況だと考える。つまり、夢や虚像を人々に与え続ける東京を今まで以上に強く否定し悲観すること、逆にそれを克服し乗り越えたあとの答えを探すこと。明確に分けることは不可能だと思うが、東京という舞台に対して人々が持ちたい答えが二極化してきているのではないか。

今後タワマン文学の分野においては、Twitter上での先駆者窓際三等兵（@nekogal21）が、来年1月30日に外山薫という名に変えてKADOKAWAから『息が詰まるようなこの場所で』という著書を発売する。これらのジャンルが今後どのような道を歩んでいくか、それともまた新たに東京を舞台とした文学・文化ジャンルが誕生するのか。今後私自身の中でも始まる上京物語も重ね合わせてこれらを鑑賞できることを、楽しみにしたいと思う。

〈参考文献〉

・FRaU.「東京」は地方出身者のわたしにとって、あまりに居心地がいい（山内マリコ）. https://gendai.media/articles/-/90944?imp=0（2022年12月16日最終閲覧）

・Hanako.『あのこは貴族』岨手由貴子監督に聞く、“女性”の生活。自身のライフスタイル、今描きたい女性像とは？. https://hanako.tokyo/learn/272982/（2022年12月16日最終閲覧）

・映画『あのこは貴族』公式サイト https://anokohakizoku-movie.com/(2022年12月17日最終閲覧）

・映画.com.あのこは貴族 インタビュー：門脇麦&水原希子が振り返る、“道が披けた”と感じた瞬間のこと. https://eiga.com/movie/91088/interview/（2022年12月16日最終閲覧）

・集英社文庫編集部.映画『あのこは貴族』公開記念インタビュー 監督：岨手由貴子. https://note.com/shueishabunko/n/ne8c7143a6c79（2022年12月16日最終閲覧）

・中川寛子『東京格差－浮かぶ街・沈む街』（ちくま文庫、2018年）

・ぴあ関西版web.「現代を生きる女性にとって問題は山積みなんです。 そういう印象をどこかで持ってもらいたかった」 青山真治監督が『共喰い』以来、7年ぶりに手がけた長編映画 『空に住む』青山真治監督インタビュー https://kansai.pia.co.jp/interview/cinema/2020-10/soranisumu.html（2022年12月16日最終閲覧）

・フィガロジャポン.いままでの価値観に縛られなくていい。女性たちの気付きとは？.
https://madamefigaro.jp/series/interview/210215-anokohakizoku-marikoyamauchi.html
（2022 年 12 月 16 日最終閲覧）
・フィガロジャポン.自分らしい生き方のヒントは、思いがけない出会いの中にある。.
https://madamefigaro.jp/series/interview/210215-anokohakizoku-yukikosode.html（2022 年 12 月 16 日最終閲覧）
・ふくおかナビ.【インタビュー】青山真治監督…「自己矛盾を抱えながら人は生きているんじゃないか」. https://www.fukuoka-navi.jp/101346（2022 年 12 月 16 日最終閲覧）